

平成元年七月二十三日（日）

郷土研究会資料

第一六八回 史跡めぐり資料

日光御成道を訪ねて

（本郷 地区 補足）

越谷市郷土研究会

第一六八回 史跡めぐり資料

とき 平成元年七月二十三日(日)

集合 越谷駅前 午前八時四十分

行先 日光御成道。本郷 地区(補足)

コース 越谷駅→北千住駅→湯島駅→

無縁坂→講安寺→旧加賀屋敷跡(心字池・

御守殿門)→旧森川町(本郷館)

昼食

本郷三丁目(かねやす)→麟祥院(春日局

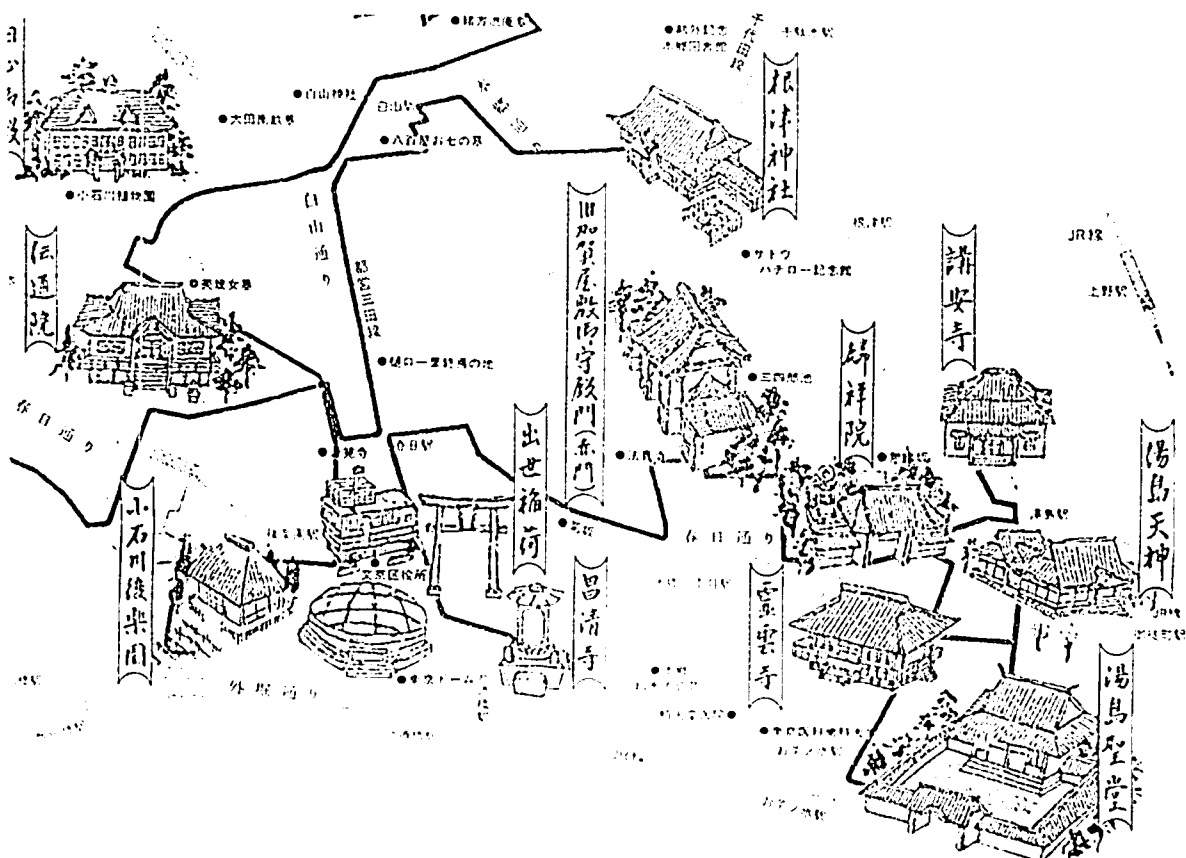
の墓)→本郷三丁目→伝通院前→伝通院(

お大の方の墓・千姫の墓他)→沢蔵司稲荷

伝通院前→^{バス}仲御徒町→北千住駅→越谷駅

会費 金二五〇〇円

案内者 理事 山田 政信



江戸時代の「御府内備考」によると無縁坂は「高さ三丈、幅三間、登り六間三尺と記されており、無縁坂の名称は、坂上に無縁寺があったからという。初め無縁寺といわれたという寺内の隠居の小庵も称仰院と改められ、無縁山法界寺も専修山講安寺と改称され、無縁寺の名称は消えている。また、一説に前田・榊原などの大名屋敷があり、武家に縁があり、武縁坂ムネヅキといったという。

無縁坂の描写は何といっても、森鷗外作品「雁」の岡田青年の散歩道として有名である。

「岡田の日々の散歩は大抵道筋が極っていた。寂しい無縁坂を降りて、藍染川のお齒黒のような水の流れ込む不忍の池の北側を廻って、上野の山をぶらつく。……湯島天神の社内に道入って、からたち寺の角を曲がって帰る。……一軒格子戸をきれいに拭き入れて、上がり口の叩きに、御影石を塗り込んだ上へ、折々夕方に通って見ると、打ち水のしてある家があった。……」

この格子戸の家には小説のヒロイン日陰の女性お玉さんがいて、毎日散歩する岡田青年にひそかな好意を持つ。この情景をしのばせてくれるたった一軒の「格子戸の家」も昭和五五年には姿を消してしまった。



格子戸のある家（昭和五十一年）

【講安寺】（土蔵造の本堂）

浄土宗。山号は専修山。本尊は、御長け二尺三寸唐渡り伽羅の香木丸木作りの阿弥陀如来の木立像にて、鎌倉時代、恵信僧都の作にて、もすその底部に源信と彫刻ありという。

八代將軍吉宗の時代、江戸町奉行大岡越前守は防火対策の町触をだした。町屋（町人の家）に外側を土で塗る塗屋、土蔵造りや、瓦葺きをすすめた。それまでは瓦屋根は町屋は禁止されていた。この防火建築で造られた珍しい本堂が講安寺にある。（文京区有形文化財指定）

寺伝によれば、宝永年間（一七〇四―一〇）の建造で、二七〇余年経過している貴重なものである。また、本堂だけでなく嘉永年間（一八四八―五三）の幕末に建造の客殿・庫裏も旧記をよく保存している。寺には四代住職顯蒼の遺言として防火の戒めの古文書が残されているという。「類火は格別、寺内門前ともに自火の用心専一に致す可きこと」とある。天保一六年（一七〇三）から二七七年間に一八度も寺の境まで火がきたという。

お美代の方は、十一代將軍家齊に最も愛された側室で、加賀前田家に嫁いだ溶姫トクメの生母である。お美代の方は家齊の死後髪をおろして専行院と称するが、家齊在世時の権勢忘れがたく、わが娘溶姫の生んだ前田犬千代を將軍の世継ぎにする陰謀をたくらんだ。しかし、失敗して押込められた。溶姫は願い出してお美代の方を前田屋敷に引きとった。明治維新で溶姫は齊泰ナリヤスと金沢へ、お美代の方は講安寺に隠棲し、明治五年ここで亡くなった。

〔旧加賀屋敷跡〕

(心字池)

ここはもと、大久保忠隣の屋敷であったと伝えられ、慶長一九年(一六一四)に忠隣が没落してから廢地になっていたのを、元和元年(一六一五)大阪城落城後加賀藩前田家が、現東大の敷地を幕府から賜わった。寛永三年(一六二六)三代利常の時、三代將軍家光訪問の内命をうけたことを機会に、かつ、国表である北陸地方が旱魃で農民たちが困窮しているとのことで、江戸に人夫として召寄せ、殿舎・庭園の造営にかかったが、三年を要したという。

この時に造られた庭園が育徳園と呼ばれ、池を心字池といい、八景八境の勝があり、築山・小亭を設けて数寄を極めたという。当時江戸大名庭園中第一と称されたという。池の水は湧水である。

夏目漱石の名作「三四郎」の小川三四郎と里見美彌子との出会いの場が、この池のほとりで、心字池は誰いうとなく「三四郎池」と呼ばれた。

(御守殿門)

十一代將軍家斉(一七七三—一八四一)の娘容姫イヌヒメが前田家十三代齊泰ナホキに嫁入りした。(文政十年) 当時は、このように將軍の娘が三位以上の大名に嫁したとき、御守殿(元來は守殿)と呼ばれる。

この時溶姫は満十四才であつた。この御守殿が出入りする為に造られた門を御守殿門といい、朱の漆で色どられたので表門の黒門に対して赤門と呼ばれた。

江戸古川柳に「赤門ができて町屋はかたすかし」とあるが、赤門築造のために周囲の町屋は数百戸も取りこわされたと伝えられる。

女性の出入りの門で優雅で、薬医門形式で、両側の番所は独立し、番所は唐破風で、屋根の上の棟瓦には葵の紋、軒の丸瓦には前田家の家紋梅鉢がつけてある。

赤門は焼けたら再建を許されなかったため、加賀藩が守護したという。

門 三間薬医門。屋根切妻造り。本瓦葺。

番所 左右桁三間。梁間二間。単層。屋根前後唐破風造り。

本瓦葺。

繋塀 左右一二尺。ナマコ塀。本瓦葺。



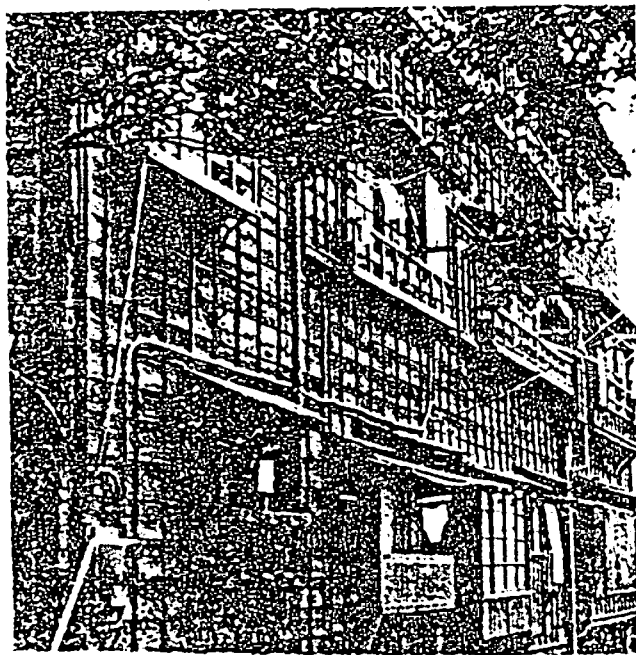
(東大赤門—御守殿門—)

古い家。木造三階建、本郷館のある旧森川町は、旧岡崎藩守本多家の敷地であった。本郷館は、明治三八年の建築で延べ一四二二平方メートルの共同住宅で現存するものとしては他に例を見ない。当時は、東大に通う留学生や地方からの資産家の子弟が入り、本郷きっての高等下宿であった。現在は一・二階がアパートで、三階だけが学生下宿として続いている。かつての森川町の下宿街のシンボルであった。

なお、この近くには金田一京助と共に近くの赤心館から移り住んだ啄木ゆかりの蓋平館もあり、その入口には啄木の歌碑が見られる。

このようにして「森川町」には、明治の文人が多く住み、ちよっと数えただけでも淡島寒月、尾崎紅葉、島崎藤村、幸徳秋水、二葉亭四迷、石川啄木などの名があげられ、さらに書生としてこの町で下宿生活をして後に大成する人にいたっては枚挙にいとまがない。

海老原医院の建物がある。明治四二年の建造で、底を支える飾り、羽目板の横積みなど明治の洋風建築として貴重である。



(下宿、本郷館の全景)

「かねやす」（本郷もかねやすまでは江戸の内）

享保年間（一七一六―一七三六）本郷三丁目の東角に兼安祐悦（カネヤス）という口中医師（歯科医）が店を開いて、乳香散という歯磨粉を売った。これが評判になり非常な賑いをみせた。

享保十五年三月（一七三〇）に池ノ端から出火した大火があり、湯島や本郷一帯が燃えた。町奉行の大岡越前守と諏訪美濃守は、再興家屋は本郷三丁目から南は耐火構造にするため、土蔵造り、塗屋とし、屋根は板や茅葺きを禁止し、瓦屋根にすることを命じた。それで、土蔵造りや塗屋の江戸の町並は本郷三丁目まで続いて、それから北の中仙道は、今まで通りの板や茅葺きの町屋であった。その境目の大きな土蔵造りの「かねやす」が目立ったものであろう。古川柳に「本郷もかねやすまでは江戸の内」とあるが、これは、江戸の姿がここではっきり途切れていたことをいっただけのものであろう。もつとも、町奉行における江戸とは、岩槻街道では駒込の先霜降橋、中仙道では西巢鴨のあたりまでが支配地であったようである。それで江戸の内、外の境は「かねやす」よりもっと北であった。



（老舗「かねやす」ののれん）

「遊歴雜記」に表門に海東法窟という額あり。この寺仏殿料として駒込と柏木の両処に於いて三百石を給い、料地の内、鳥さし等の殺生を禁じ百姓等は諸役を免許し給えり。……又外構のからたちの生垣の年来刈込みたるも又一品かや……。」とある。

本尊は釈迦如来。本願は春日局なり。春日局の菩提所であり墓所である。寛永元年（一六二四）三代將軍家光から湯島のこの地を拝領し、寺院を建立した。春日局は、一浪人の妻、逆境に生きた自分が將軍家光の乳母となり、功成り名をとげたのは天の恩沢であり、將軍家のおかげであると感謝した。

それで寺号は「報恩山天沢寺」と称した。寛永十一年局の子である小田原城主の稲葉正勝が三十八才の若さで死んだ。これをきっかけに春日局は仏門に入り「麟祥院殿仁淵了義尼大姉」の法号を受られた。この法号から家光の命により「報恩山天沢寺」は「天沢山麟祥寺」と改められた。

春日局は寛永二十年九月十四日六十五才にして没した。その墓碑は無縫塔で大きく立派なものである。卵塔の部分と台座の上部に東西南北に穴があいている。遺言の「死して後も黄泉より此の世を見て、邪道を正すべし」によるといわれる。（寺伝ヨリ）



春日局墓（麟祥院）

影堂本堂の左にあり。二位局の親影をおく。(丈五寸余。家光、局の没後寄付した。)この像は台命によって狩野探幽、局の生前、装束を着せし姿を目のあたりに写せし像なり。表装も大將軍命ぜらるる所にして、唐草のどんすに卍寿の字を織り入れてある。毎年九月十四日忌日には参詣をゆるす。

又、寺伝にいう、寛永五年三代將軍不予にあらせられたとき、局は自ら東照大権現の神前に詣で、若し今大故あるときは国家の安危にかかる。因って願はくば、妾が身を以ってこれに替り奉らん。若し恢復あらしめば忽ちに身に病苦を受け、誓って医薬を用ひずして死せんと云々。その忠誠に感応ありてか、日を経ず常にならせたもう。因って身を終るまで針灸薬餌を用ひずとある。同六年格に上り参内す。春日局の名を賜う。(江戸名所図会 麟祥院ヨリ)



緋袴姿の春日局 (麟祥院蔵)

浄土宗。無量山伝通院寿経寺スウキョウジという。戦国時代、お大の方の実家は三河国刈屋の城主水野忠政であった。十四才の時岡崎の松平広忠と結婚した。実家の刈屋城主となった弟は、織田方についたため、駿河の今川氏と結ぶ徳川氏とは離れたため、お大は幼い家康をのこして、離婚させられた。(お大は後に、織田方の久松俊勝の室となった)。お大の方は、後、家康の手厚い孝養を受けていたが、京都見物中、病氣にかかり、その子久松定勝の居城伏見で慶長七年(一六〇二)七十四才で亡くなった。家康は遺体を江戸に運ばせ大塚野(現小石川五丁目あたり)で火葬にし、現在の墓地に葬った。

この場所にお大の方の法名に基き、光岳寺と智香寺の二寺が供養のため建立された。(二寺共戦災で焼失移転) (遊歴雑記ヨリ) 堂宇の建立は慶長十四年(一六〇九)で、これが伝通院である。(それまでは、伝法院―後の宗慶寺で法要) (文京の歴史ものがたりヨリ)

お大の方の法名は「伝通院殿ツツノ睿ト光クワ岳ガク智香大禅定尼」で、伝通院もその法名からとった。院号が通り名になつている。將軍家の保護もあつく寺領も八三〇石であつた。関東檀林の上席にあり、常時学僧たちが一〇〇〇余人寄宿し修行していたという。

墓地には、江戸時代、徳川家ゆかりの人たちの墓だけで特に婦人たちの墓で、お大の方の墓をはじめ千姫の墓、孝子の墓(家光の正室)があり、男子は將軍の三才以下の子供たちである。のちには一般に開放され、有名人の墓も多い。

【沢蔵司稲荷】

江戸時代の初め元和年間（一六一五～二四）伝通院の学寮に、沢蔵司という学僧がいた。智徳がすぐれ、僅か三年で浄土宗の奥義を極め、仲間からも尊敬されていた。

元和六年のある晩、学寮長の極山和尚の夢枕に沢蔵司が現れ、

「我は、まことは千代田の城の稲荷大明神である。浄土の教えを学びたくて、ここにお世話になった。これから元の神になって帰るが、ついてはお礼に守護神となって永く当山（伝通院）をお守りしよう」といつて白狐の形をあらわし、暁の雲にかくれたという。

極山和尚は、さっそく住職の廓山上人に話し、慈眼院境内に沢蔵司を祭った。

伝通院の門前にそば屋があり、沢蔵司はよく食べに行った。沢蔵司が来た時は売り上げの中にきまつて木の葉が入っていた。ある日、その沢蔵司の後をつけると山内の稲荷社に帰ることがわかり、あらためて「そば」をお供えするようにしたという。

沢蔵司てんぶらそばがお気に入り（古川柳）

この話は、「江戸志」「江戸砂子」「江戸名所図会」などに載っている。

引用並びに参考書名

文京の文化史

文京区教育委員会

文京の歴史物語

文京区教育委員会

文京の史跡めぐり

文京区教育委員会

遊歴雑記初篇

東洋文庫 平凡社

新版江戸名所図会

角川書店